

●日本語学の対象と方法●

文章・文体

1 文章・文体を研究するための基礎概念

人の行う言語活動において、あるまとまりをもった表現の具体相をテキストと呼ぶ。このテキストが、文章論・文体論の研究対象である。

テキストは、書き言葉と話し言葉とを包括する概念であるが、「文章」と「談話」という語でこれをとらえなおすとき、書き言葉を文章、話し言葉を談話とよぶのが通例である。書き言葉のマクロの単位体を示す用語としても「文章」をもちいる。文章のミクロの単位体は、基本的に「文」であり、分析の過程で句や語にも言及する。中間的なメゾの単位体には、改行を指標とする「段落」や、改行

お 木 夫
ま 真
むら 村
の 野
上越教育大学助教授

通達されるテキストについて、「文章論」は諸単位の機能やまとまりかたを問い、「文体論」は個別性や類型性を問う。

にかかわらない内容的なまとまりとしての「文段」あるいは「段」を設定する。これらの複合した「連文」「連合段落」「連段」なども認定できるが、単位体とはみなさない。言語活動において、ということは、書き言葉か話し言葉かを問わず、実際のコミュニケーションに即して考えることを意味する。すなわち、抽象的にあたえられた言語資料を扱うのではなく、送り手（書き手や話し手）と受け手（読み手や聞き手）を介在させて言語をとらえる、ということである。コミュニケーションとは、表現の指示している意味を、一方から他方に一対一の対応で転写させることではない。送り手と受け手は、相互に関わりあい、それぞれが能動的に表現に言及するのであって、コミュニケーションに

において、受け手は自分自身の環境や知識をたよりに、表現から新たに情報をつくりだす。

まとまりをもった表現を対象にするというのは、たとえば辞書の任意の見出し語や例文として、語や文が意味的に関連することなく列挙されているばあい、これを文章論・文体論でとりあげる対象としないことを意味する。前後に境界をもった一つの文学作品やエッセイは、そこに書き言葉としてのまとまりがあり、話し言葉では、一回の電話のやりとり、日常的な座談などにまとまりを見いだすことができる。これらが、まとまりをもった言語表現の単位体として、サイズの大きい、マクロの水準で設定されるものである。

そのまとまりかたを分析するところに、文章論の本質がある。テキストにおいて、どのような要素が、どのように機能し、どのような関係をつくりだし、どのような様相でまとまりを構成しているのか、が問われるのである。

表現の具体的なありようをとりあげるのは、一つ一つの表現のかたちをそのままに、研究対象にするということである。分析の過程で、テキストを類型化したり、一般化してとらえなおすとしても、その出発点においてあたえられたテキストの個別性や印象を認めることが大切である。こ

の個別性や印象を、コミュニケーションのなかでとらえようとするとともに、文体論の本質がある。

2 文章論の研究対象と方法

2-1 文章における単位の認定と研究方法

文章を語・文とならぶ単位体として認定し、これを言語分析の対象としたのは、時枝誠記である。時枝は、文法論において文章論を提案したのであるが、文章を文さらに語に還元して説明しうるものではないことを明らかにしている。これは説明原理としてそうなのであり、ミクロやメゾの単位体に着目しての、文章の分析は、充分に有効である。

まず、語の単位によつて文章をとらえようとするたちが考えられる。あるテキストを構成する「語彙」について、その頻度や意味のかたよりを調査することで、テキストの内容をある程度まで明らかにすることができる。しかし、これだけでは語彙の調査にとどまる。そこで、段落などのメゾの単位を基準に、テキストの流れに沿って、「主要語句」の現われ方を観察しなおしていけば、テキストの意味的なまとまりとの関連性をとりだし、さらにテキストが展開する様相を知ることが可能になる。また、「同一語

句」や「関連語句」の系列を仮定し、それが「反復」したりまとまりを形成したりする様相をとりあげれば、さらに詳細な結果がえられる。この種の調査には、語句の関連するネットワークや反復の図表を作成するなど、視覚的な工夫が分析の役にたつ。

この方法は、記述の客観性が保証できるものの、文における語の機能が無視されているため、テキストの表層の分析にとどまる恐れがある。そこで、テキストのなかで語あるいは句に着目するとき、それが一つ一つの文ではたしている機能を参照しながら行う方針がたてられる。「文法論的文章論」という研究領域の提案は、この水準での研究が中心になり、広範な方法がある。「連鎖・連接・配列・照応」などが説明概念としてもちいられている。

文法論を拡張するという方向で、「連文論」の提案がある。これはテキストにおける二つ以上の文の連続体において、文の成分がどのように意味的につながりの成立に機能しているかを探るものである。前後の文脈あるいは言語外の環境の要素にどのように言及しているかに関わる「照応」の現象もこの段階での研究である。語句の文法的な機能が参照されるので、反復だけでなく文の成分の「省略」の現象も視野にはいる。これらの現象は「結束性」と

いう用語でも言及されている。接続表現はこの段階での分析の重要な指標である。

先に述べた主要語句の現われ方に着目する方法について、語句の文法的な機能を考えあわせると、たとえば「題表現」がどのようにうけつがれているのか、あるいは文末の表現がどのように連鎖し、また変化しているのか、などの分析が可能になる。さらに、「叙述表現」にあらわれた語句が、題表現に機能転移する現象なども観察できる。この段階にいたると、「テキストのテーマの構造」とらえることができ、書き手によってあたえられた形式段落のみならず、内容的な、意味的なまとまりとしての文段が分析の対象になる。

段落・文段など、中間的な単位の研究は、提題・叙述表現の関係、主要・関連語句や文末表現の連鎖を手がかりにすることで、その規模やまとまりの様相を知ることができる。さらに、「中心文（トピック・センテンス）」を取りだし、その形式や機能、作用する範囲を特定して、段落・文段との関わりを明らかにする必要がある。これらを複合させていくことで、段落・文段相互の関連性や、文章全体における段落・文段の位置づけをとりだすことができる。そこには、階層の関係や重層する関係、ネットワークの関係な

ど、多様なまとまりの構造が浮び上がる。また、その統括力の大小やまとまりの範囲も問われる。

文章の全体構造をとらえる単位は、とりあげる文章の規模にも依存するので、単純に、段落や文段およびその複合体を想定するわけにはいかない。現段階では、いま述べた「統括」の機能に即して考えるのが着実であり、文章の冒頭や末尾の表現も重要である。

なお、ここまでの記述は、マイクロからマクロへという方向をたどったが、これを逆にたどることもありうる。ただ、マイクロの単位から出発するばあい、より小さい単位の表現構造や機能を規定して、その積み重ねで帰納的に分析が進められる。一方、マクロの単位からたどるばあい、表現されている事象そのものの構造や機能を、分析者があらかじめどのように認知しているかが、説明概念を構成し、研究は演繹的なおもむきを呈する。

文章の要約に関する問題は、右の双方向から考察する可能性がある。この領域においても、分析のための単位の認定が問われるところである。

2.2 構造から機能へ

語彙論や文法論などマイクロの単位体の研究成果をふまえ

て、文章の分析を進めるのは正当な方法であり、これまでも多くその態度がとられている。これは、文章の構造を明確にとりだすために必要な考え方である。しかし、はじめに述べたように、テキストをコミュニケーションに即してとらえようとするとき、その動態を明示しがたい。連文を考えるばあいにも、文法論の拡張ではなしに、文相互の機能の関係からとらえることができる。さらに、個々の文や段落・文段がテキストの展開に作用する機能をとりだして、類型化することができる。たとえば、時間の範疇とのかかわりかた、話題の展開や推論のしかたなどが問われる。また、テキストからどのように情報をとりだしているのか、文章を順行するか逆行するか、という読み方によってとらえかたが異なる。そのような研究では、言語運用論や認知科学など、関連領域の知見が参照される。

3 文体論の研究対象と方法

3-1 文体を規定する要因と研究方法

文体論では、研究方法を規定する前提であるかのように「語学的・文学的」という区分がしばしば行われてきた。しかし、テキストをコミュニケーションの中でとらえようとする以上、いずれかの領域に安住してはならない。文体

文章・文体

の研究方法を二項対立で規定するとしても、テキストのとなえかたについて、「量的―質的」「表層的―深層的」「靜態的―動態的」「共時的―通時的」などの複合的な視野で考えるのが生産的である。また、分析の対象とするテキストの性質やジャンルについての吟味が大切である。

テキストの何らかの要素に着目して、数量的に分析する方法がひろく行われている。たとえば、文の長さ・品詞の比率・色彩語などの語彙の比率・和語漢語などの語種の割合・文末表現の偏差・文字表記・句読点の打ち方・種々のレトリックの技法などがとりあげられる。これを多様なテキストや書き手について調査することで、それらを類型化し、異質性や同質性を取りだすことができるのである。このような方法は、規準が明確であるが、選択された項目に制約される側面が強い。そのため、個々のテキストに固有の現象を、大量調査が見失わせる可能性がある。古典の分析ならば、仏教語彙を調査するなどの配慮がなされているかどうか、きめこまかな態度がもとめられるゆえんである。

この研究方法によって、主として古典の、執筆者の推定が行われている。時には作品の真贋を判定することができ。ただし、この推定は質的な分析によっても可能であ

り、方法は多様でありうる。

さて、量的な分析にかぎらず、テキストの表層の要因をてがかりにして文体をとらえようとするのは着実な方針である。テキストにもちいられている語の単位体においても、歴史的な属性や待遇的な価値、和語・漢語、雅語・俗語、幼児語かいなか、など多様な特徴が文体を規定する機能をはたす。他に、係結びの現象や文以上の単位での待遇表現も、文体を制約する。

文章論において述べた文法論的な観点も考慮できる。かつて Kuroda (1973) は、「あつい」などの知覚形容詞や「自分」の用法にふれて「視点」のありかを論じ、「報告文体・非報告文体」の区分を実証しようとした。この区分の妥当性は検討しなおす必要があるものの、文体論の一つの研究手法として重要な問題提起であった。日常談話と小説の地の文とでは、文末のテンスの意味・機能が異なることが指摘されており、やはり視点の問題にふれることが多い。テンスに加えてムードの表現、人称の識別をとりあげると、描出話法や内的独白の表現にも言及でき、歴史的現在の研究もこの周辺に位置づけられる。

描出話法(体験話法・自由間接話法)は、古典についても、しばしば文体論のテーマになる。これは本来、印欧語の話

法や文体について研究されてきたものだが、それを日本語の表現や翻訳の問題として展開しようとするのである。しかし、文法体系の異なる言語への適用なので、単純な応用は危険であり、内的独白や歴史的現在にも同様の注意が必要である。

以上は、テキストの表層に即した、静態的な分析方法にかなう問題であったが、文章の展開をとりあげて、諸単位のコミュニケーション上の機能を視野にいれ、したがって、「語り手」「読み手」また観察者自身をコミュニケーションの過程に位置づける観点が求められる。このような研究では、表層の要因をてがかりにするとしても、テキストの深層との間にいる読み手の立場にたつた動態的な分析方法が必要である。「印象」を問うのはこの段階においてである。

すでに取り上げた文末表現は、数量的な分析方法が有効であるし、文章論における分析の対象でもあった。これを文章の展開においてとらえなおすと、たとえば、ある作品で「タ系列」と「非タ系列」の頻度や分布に偏りがあったとき、時間の流れの認識のしかたと表現の対応が問題として浮びあがる。その表現がどのような内容の箇所にあらわれ、どのような効果をあげているか、読み手はそのテクス

トをどう読み取りうるか、などが問題になるのである。このような動態的な研究方法は、先にあげた描出話法などについても適用できる。

テキストの中間的な単位体に着目して展開の様相をとりだし、そのタイプを個別性の問題としてとらえる方法がある。描写の変化、表現対象の配列や組み合わせ、比喻表現への依存のしかたなど、着眼点は個々のテキストに即して設定すべきであり、あらゆるテキストを一律に扱うと、文体の本質を見のがす。

このような、文体の動態的な分析や説明概念にも「視点」「共感」などのもちいられることがある。作中人物・語り手・読み手などと、表層の文法論的ながかりとを媒介する範疇として、これまでもすぐれた研究成果をもたらしている。しかし、抽象的で比喩的な用語なので、それが一人歩きしないよう、概念規定には注意を要する。

比喻表現で代表されるレトリックの研究は、それだけで一つの領域をなすが、ひろく文体論にふくめてとらえられる。単に表現技法の分類作業を行うのでなく、その表現を指標として、文脈的な効果をとりだすことが大切である。

3-2 構造から認知へ

文体論は、テキストの表層の要因をてがかりとしながら、その個別性や類型性をとりだすことで展開する。文体を規定する多様な要因は、総体としてテキストを性格づけるべく、構造的に関連づけられる。しかも、それぞれの要因が文体の形成に機能する度合いには差が認められる。だが、コミュニケーションを配慮するのであれば、われわれがそうした要因を認知する過程にも注意をはらわなければならない。テキストの要素は、それを読みとる過程でたがいに結びつき、文体を形成するからである。比喩の理解や、あるテキストと他のテキストとの関連も、表現と意味や知識を認知する過程で説明されることになる。

4 関連領域への広がりとの相互作用

文章・文体の研究では、文法論や文学のみならず、多様な関連領域との相互作用が生じる。それは、人の行う言語活動そのものの広がりに対応し、研究のシステムが動的に開放されているからである。談話の研究は、中でも関連性がたかく、文章に設定した単位体との異同が問われる。たとえば、段落に対して「話段」の提案がある。また、中心文に対して「中心発話(トピック・アタランス)」が想定でき

るか、できるなら形態や機能がどこまで一致するか、などが新たに検討されてよい。談話の文体は、Tannen (1984) のあげる指標が参考になる。「話体」とも呼ばれている。認知科学や言語運用論には、先に言及した。このような広がりには、「テキスト記号論」と呼ぶべき領域において、やがて組織化されていくだろう。

【参考文献】

- 阿部純一他(一九九四)『人間の言語情報処理』サイエンス社
市川 孝(一九七八)『国語教育のための文章論概説』教育出版
Kuroda, S-Y. (1973) "Where epistemology, style and grammar meet." *A Festschrift for Morris Halle*: Holt.
永野 賢(一九八六)『文章論総説』朝倉書店
長田久男(一九八四)『国語連文論』和泉書院
中村 明(一九九三)『日本語の文体』岩波書店
日本文体論学会編(一九九二)『文体論の世界』三省堂
Tannen, D. (1984) *Conversational Style*: Ablex.
寺村秀夫他編(一九九〇)『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう
時枝誠記(一九六〇)『文章研究序説』山田書院(明治書院復刊)